

隠れた所におられる神様

「マタイによる福音書」6章5～8節までを朗読。

6節「あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においでになるあなたの父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであらう」。

6章1節から、隠れた所におられる主、また隠れた事を見ておられると、繰り返して語られています。信仰生活で、何よりも大切な事は何でしょうか。それは神様がいますことと、報いて下さるお方であると信じる。そのように「ヘブル人への手紙」にあります。神様がいますことを信じる、と言って、神様は目で見ることができません、その声を聞くこともできません。手で触ることもできません。いるやら、いないやら、訳が分からないと、よく言われます。確かに私たちの神様、聖書を通して証しされている神様は、肉体の目をもって、それをはっきりとここに神様がおられますと、見えるものではないことは確かです。「イザヤ書」には、神は隠れた神でいらっしゃる、ご自身を隠しておられると語られています。私たちが信ずる神様は、目に見えないお方。ですから、多くの人たちはそれに代わるものとして、偶像を造ります。いろいろな像を作って、これが神だと、神様が見えないから、見えるようにしてやろうとなる。しかし、いくらそんなことをしても、それが神様ではないことは確かです。

神様はあくまでも目で見ることができない。なぜなら神様は物質的な存在、目で見、手で触り、口で味わい、五感を通して分かるようなお方ではないのです。物質的な存在としてではなく、神は霊であると言われるように、神様は霊的な存在、霊なるお方であります。その霊は、私たちの内にある霊につながってくるのです。

私たちは普段の生活で、自分の内に霊が働いていることをあまり自覚していません。ところが、何かの拍子に、人の五感を超えた、言葉を超えた、人の理屈を超えた何ものかに心がゆさぶられることを、人は必ず経験します。よく言われることですが、大海原をみたり、あるいは遙かかなたまで繋がっている山なみを眺めたり、大空を見る時、夜空の星を見る時、本当に恐れのようなものを感じます。それは、見るものに感動したということもあるでしょうが、そのことを通して、私たちの魂にある、神様から与えられた霊力が神様の力と共鳴すると言いますか、響き合うところにあるのです。神様を知るとは、霊的な目で、そこに神様がおられると信じることです。

先だってある先生と話をしていたとき、アブラハムの話になりました。アブラハムが神様の存在を身近に感じたのは、満天の星空のもとに出て、「この星を数えることができるか」と言われて、アブラハムは神様の偉大さを感じ、感動するという記事の話になりました。その先生もか

つて、イスラエル旅行に行ったことがある。その時、ユダの野にあって、星空の美しさに感動した。ところが都会に住んでいると、夜空に星が見えない。そして皆で夜景を見に行く。夜になると、百万ドルの夜景、北九州でも皿倉の上から夜の街を眺めて、きれいだと感激します。天にはもっとすばらしい星空が広がっているのに、人はどうしてか、都会の夜景をみて感動していると言って、その方が笑っておられました。なるほど、そうだと思いますね。確かに皿倉山に夜ケーブルで登って、北九州の街を見ると、様々な灯りが点滅して、まさに宝石箱をちりばめたという譬えのような光景を見ます。しかし、それは私たちの魂には響いてきません。「ワー、すごいね、きれいだね」と言いますが、その背後にある、もっと大きな力を感じることはできません。フェイクというか、偽物だからです。都会にあっては見えませんが、田舎に出かけると、満天の星空。その先生も、ご自身が筑後の田舎に住んでいらっしゃる。そうすると、町の人が「あの町の夜景がきれいだよ」「福岡タワーに上って眺めるといいよ」と言われる。でも「私は毎晩、夜遅く帰る時、夜空を眺めると、満天の星空で、自分はよほどこちらの方がきれいだと思う」と言われて、そうだろうなと思います。

私たちが感動を覚えるのは、やはり神様の作品として、神様のわざとして、そこに込められた神の霊が働くからです。人生の中で何度となく、そういう感動を目にすることがあります。ところが、そ

れをいつも感じられると良いのですが、案外感じない。他のことで忙しく、この世のことに心が奪われて、神様のみわざに目を向けるゆとりがなくなっているのが現代でしょう。神様を目で見ることができない、手で触ることができない。となると、すぐに人は存在しないものと思ってしまう。イエス様が「**見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである**」(マタイ 28:20)と約束しておられる。イエス様はよみがえって、今も、いつでも、どんなときでも、私たちと共におられる。いつもここにおられる。これが“臨在”と言うことです。神様は今、ここに、私と共におられることを信じる。これが信仰の中心です。神様が今ここにおられる、その神様の前に私たちは常に立っている。ダビデが、「**わたしは常に主をわたしの前に置く**」(詩篇 16:8)と告白しています。神様を私の前に据えていきますとは、私たちがどんな状態に置かれていようと、そこに神様が常におられることを自覚するのです。今、ここに主がおられるのだと、それを態度で示さなければなりません。普段の生活は、そこに神様はいらっしゃらないかのようにふるまう。そして時々、「そういえば、神様がおられたはず。お祈りでもしよう」となる。見えないけれども、神様はいつもここにおられますと信じる。信じる時、神様はそれに対して応答してくださる。神様はいらっしゃるが、単なる飾りにすぎない、何もすることができない神様ではない。求める者に必ず答えて下さると信じる。

私たちは今、イエス様の救いにあずかって、神様を信じる者とされた。私たちは神様と共に生きる者となって、自分が生きるのではなく、神様が私たちを恵み、はぐくみ、育て、そして日々の生活を与えて、生きる者として下さっている。だから私たちのする事、語る事、どんな事も、神様によらないことはない。そうと知ってはいるが、実際の生活の中で、そのように神様を信頼し、神様が報いて下さるお方であると、絶えず自覚して生きているか。そのことは少し前の所にこう記されています。

「マタイによる福音書」6章2～4節を朗読。

言い換えますと、誰のためにそれをしているのか、誰からの報いを望んで、その事をしているのかに尽きるのです。施しをする、これは世間でも称賛されるべき、良いことです。だから良いことをすればほめられる。困っている人や悩みの中にある人を助けるために、何とかしてやろうと、自分の財を尽くし、力を尽くして、犠牲を払って、慈善を行う。でも、それが神様のために、主のために、神様がそのことを喜んで下さると、神様の報いを期待してすることなのか、それとも人の称賛、あの人は立派な人、あんな素晴らしい自己犠牲をして、あるいは苦しいことを耐えながら、すばらしいことをしてくれる。あの人に栄誉賞でもあげたらいいのではないか、そのような賞賛を期待する。それだけが目的ではないとは思いますが。もちろん、慈善をする場合、

相手の人を助けてやりたい、何かその人のためになることをしてあげたいと思っ
てするでしょうが、それ以上に、自分の
していることが人に知られて、「良いこと
したね」とほめられたい。「あなた、立派
やね」、そう言われることを期待する。そ
うであったならば、彼らはその報いを受
けてしまっている。そうやって、人から
称賛され、誉れを受けるならば、神様か
らの報いを受けることはできない。私た
ちは常に神様の前で生活している。見え
ない主がここにおられる。その主のため
に、果たすべきことを尽くしていく。そ
のためには、人に知られるようにする。
人に宣伝して、「こんなにしています、あ
んなにしています」と言い募って、皆か
ら「立派、立派」と、喝采をあびる。そ
のためだったら、それはそこで終わり。

2節に「だから、施しをする時には、偽
善者たちが人にほめられるため会堂や町
の中でするように、自分の前でラッパを
吹きならすな。よく言うておくが、彼ら
はその報いを受けてしまっている」と。
人々から称賛され、報奨金でも貰い、表
彰されるようなことになったら、それで
神様の報いを失ってしまう。私たちは誰
のためにしているのか。そして見えない
神様を前に置いて、その方に喜ばれるこ
とをしていく。これが右の手のしている
ことを左の手に知らせるなということ。
私たちは片手でわざをするよりも、両手
でします。片方の手がする時、もう片方
の手を添えるなりしている。いつも両手
を使います。だから私たちは自分のして
いることをあの人にもこの人にも知って

ほしい。見えない神様の前に自分を置いていくよりは、この世の見える人に報いを求めてしまう。

なぜそのように言われるのか。神様がいますことを信じないからです。見えなくても、ここに神様がいますと信じる。そしてその神様の前に私たちは生きている。だから私がする事もなす事も、すべてをご存じの神様、見ていらっしゃる神様。神様は、私たちのすべてのことについて報いて下さるお方である。神様の報いを望み見ていく。時には人の称賛や人の誉れはある意味では邪魔なのです。神様と私たちとの間を妨げる壁になっていきます。神様からの報いを喜びとして、神様のみこころに従うことができたという感謝がわいてくるのは、人に知られるためにしたのではなく、見えない神様の前に絶えず自分を置いていくことです。だから、聖霊に満たされた弟子たちは盛んにイエス様の福音を宣べ伝えました。その時、多くの人々が悔改めて、心を一つにし、共に集まって、主を賛美し、ほめたたえる教会ができた。その時、ささげものを持ってくる。ある人は地所を売った費用を、主のものですからと、それを誰にも分からないように、使徒たちの足もとに置いたとあります。誰からのものか分からない。知っているのは誰か、神様だけ。神様だけが知って下されば、それですべてです。ここが神様を信じているかの試金石です。自分がこんなになっている、あんなにしていると言いたい、見てもらいたい、評価してもらいたいと思っている時、私たちは神様の前ではなく、

人の前に生きる者となっている。教会はあくまでも人ではなく、神様のもの。だから神様の前に、見えない方の前に歩んでいる。しかもそのお方は、すべての事をご存じでいらっしゃる。だから教会でも見えない神様に一人一人が導かれた所に従って、やるべきことがあればやって下さいと言います。まさにある意味では自由というか、愛に感じ、恵みに感じて、私はこの事をと自発の思いをもって、右の手のすることを左の手に知らせるな、誰にも分からない歩みをするとき、初めて自分の信仰がはっきりするのです。何を信じているかがはっきりと分かる。

以前、婦人会のとき、「これは感謝です」と言ってお菓子などを持ってこられる。神様に感謝するのだから、誰が持って来たのか、分からなくてもいいはずです。そういうつもりで誰からのものと言わずに配ります。そうすると、「これ、誰がしたの?」と。「誰がしたか分からないなら食べられないじゃない」。そういう話になります。それである時、「そういうことを一切やめて、誰からではないから、本当に神様の前に感謝したい方がおられたら、台所に置いておいて下さい。そうしたら、皆さんに差し上げますから。したくないのであれば、しなくていい」、そう言ったのです。そういう形で始めました。そうしたら、黙って持ってきて置いて下さったから、それを配りました。これは神様が備えて下さったものと感謝していただく。ところが、食べ終わってから、持って来た方が「今日のおやつはどうだった?」「あなた、一つしか食べなかった

の。もっと食べていいよ」、明らかに誰が持って来たのかが分かる。人というのはどこまでいっても抜きがたい自我があるのです。やっぱり自分がしたことを認められたい。でも神様を前に置くというのは、それを捨てることです。

ある時、友人の伝道師の方がご夫婦でうちに泊まっておられました。そして今までの信仰の歩みについて証しをしました。教会では「右の手のすることを左の手に知らせるな」とあるのに、どうしても人間的に知られたいと言うから、一切持ってこないようにと決め、皆さんが遠慮なく食べられるような会にしたと話しました。それまでは持ってきた人がお菓子を配る。その人がまずお証ししてもらうこととなっていました。持ってくるのはお証しするための礼儀のようになっていた。そうすると、「何も持って来なかったから、お証しできません」となる。だんだんとおかしくなっていくのです。

小さなことですが、どこかで常に自分を見せたい、ほのめかしたいのです。これは人の持っている罪ですね。神様を信じている、神様の前にしていると言いつつも、誰にも知られないのはおかしい。やっぱり言うておこうかとなってしまう。イエス様はその事を言っています。ですから4節に「それは、あなたのする**施し**が隠れているためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」と。だからと言って、自分でしたことを言うなど言っているのではなく、大切なのは見えない主に

見ていただく。私たちの目には見えないが、ここに主がいますと、神様の前に、どんなことでも、施しであろうと、祈りであろうと、見えない神様の前に私たちは歩んでいる。神様がいますことをどのように自分の生活の中で具体化させるか。人の称賛を求め、また自分の力を誇り、自分の知恵を自慢するのであれば、どこに神様がいらっしゃるのか、という話になります。そうではなく、「同様にあなたがたも、命じられたことを皆してしまったとき、『わたしたちはふつつかな僕です。すべき事をしたに過ぎません』と言いなさい」(ルカ 17:10)、とイエス様はおっしゃる。何をするにしても、主に果たすべきことをしている。

ですから5節以下に、「また祈る時には、**偽善者たちのようにするな。彼らは人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立って祈ることを好む。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている**」と。イエス様の時代は大通りやつじに出て、立派な信徒ですと言わんばかりの振る舞いをする。ところが、自分の生活には、どこに神を敬う行いが、わがが、歩みがあるか。神様の報いを望み見ることとは、とりもなおさず、今も、生ける神様がいますことを信じることに他なりません。自分の計画と自分のわがで上手くいった、あるいは、失敗したとき、誰彼が悪いとか、自分が力不足だというのであれば、自分が神様になっている。そうじゃなくて、何をするにも、見えない方を見るがごとくにと、「へブル人への手紙」にあります、見えない神様がここにお

られますと信じる、その信仰に立つことです。そして神様が報いて下さる。6節のところに「すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださる」、神様が私たち一人一人にそのわざに報いて下さる。どういう形で報いて下さるかは分かりません。結婚して、子育てをなさった方にとって、子供を育てるのは本当に大変な事です。子供は成長していく。やがて親元を離れて自立していく。そこで終わりです。考えてみたら、これほど損な話はない。苦勞して、夜も寝ないで、一生懸命育て上げて、まさにそれこそ、神様にささげるわざとして受け入れていく以外にない。ところが、今の世間はそういうことがわからない時代ですから、いろいろな問題が頻発してきます。それは誰のためにこの事をしているのか、正しい生き方がないからです。だから、やがて自分が弱ってきたりすると、「子供が何とかしてくれるに違いない、私はあれだけ、この子のために犠牲になったのだから」と、つい昔のことを思い出したりする。主の前に果たすことを尽くして、後の事については神様にゆだねる。育て上げた子供が自立していったら、そこで「はい、私の責任は終わった」と、神様の前に感謝して、一つの使命が終わるのです。その後、子供たちが何かしてくれることがあったら、それは神様の報いがあります。そこをきちっと心の内で整理して、神様の前に姿勢を整えないと、人間関係、家族関係の中で、様々な問題が跡を引いていきます。いつも隠れた所におられる神様、見えない神様の前に、常に自分を置いていく。そして私たちのす

ることはどんなことも主のために、キリストのためにしていること。今、私を見て下さる主がおられる。主は見ていて下さり、それに報いて下さる。

だから6節の後半に、「すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう」と。私たちのことを常に見ておられる方がいらっしゃる。これは嬉しいようで、怖いです。私たちのすべてを知っておられるのは神様です。私たちの心にどういう思いがあるかも、神様は全部知っている。しかし、私たちは他の人、同じ生活をしている家族の事、奥さんの事、ご主人の事、彼らの思いを知ることはできません。しかし神様はご存知です。だからあの人に何か言えば、こう理解してくれる、わかってくれるだろうと言いますが、相手は一向に分からないのです。あるいは逆に、他の人からいろいろな事を言われても、すべてを理解することはできません。人はあくまでも一人一人なのです。夫婦だから、何十年一緒だから、相手の事がよく分かっているかという、分からないのです。じゃあ、誰が分かっているのか。神様はご存知です。神様は私の心をも知っている。またあの人のお思いも、神様はご存知です。

だから私たちは神様に祈る。祈ることによって、神様は私たちの知りえない、相手の心をも教えて下さる。その時々に必要な事、この人はこう思っている、こういう願いを持っている、こういうことを考えていると、心の思い、感情までも、神様は私たちに教えて下さる。私たちが

直接その人に聞き出そうとしても無理です。だからいつも主に聞くのです。神様に祈る。親子だってそうです。自分の血を分けた子だから、私の事はこの子は何でも知っていると思っていますが、いいえ、知りません。子供だからといって、親の感情、今どういう思いを持っているか、何を願っているか、どういうことをよしとしているのか、何もわかりません。しかし、神様に祈って、教えられていく。これは幸いです。神様はどんな人の心をも知っています。

だからと言って、神様は全部教えて下さるわけではなく、私たちが知るべきことを教えて下さる。いろいろな方のために祷告しますが、祈りながら、あの方はこういう思いを持っていると、神様が私たちの心に教えて下さる。だから神様を中心にして連なっていく時、はじめて相手を思いやることができ、いろいろな事の奥深い意味、物事の奥に潜んでいる事態、事柄を、必要な時に教えて下さる。だから隠れた所にいたもう神様に祈れと言われる。そして隠れたことについて神様は報いて下さる。報いるとは、具体的なわざばかりでなく、私たちの思いに、神様がきちんと教え示して下さる。案外心は自分の思いばかりが占領している。人のことを思う余地がない。びっしり埋め尽くしています。でも祈っていますと、神様は心を整理して、ちゃんと空間をあけて、そこに相手の人の思いが届くようにして下さるのです。見えない主がここにおられて、私を見て、知って下さる。あの人のことも、この人のことも、神様

はすべて知っておられる。何も言わなくても、神様は知っていて下さる。だから相手のことがよく分からない時、神様に聞く。そうしたら神様は秘かにこの人は何を問題としているか、何を悩んでいるか、何がうれしいのか、いろいろなことを教えて下さる。だからと言って、神様はやみくもにスパイのごとく教えて下さるのではありませんが、今、何がその人のために必要なのかを教えて下さる。

神様は目には見えないが、常に私たちを見ていて下さる。またどんな時も報いて下さる、答えて下さる、応答して下さる、目をとめていて下さる。この主のまなざしを感じ続けることは私たちの幸いな恵みであります。同時に主の目はすべての人に注がれている。隠れることができません。見えない主が、必ず私たちと共にいて下さる。そればかりか、報いて下さる方であることを信じて、その方の前にたえず自分を置いて行きたいと思えます。

ご一緒にお祈りいたしましょう。